熊野の森から

怪しの熊野

其の六十二「上富田の怪異」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

上富田には、富田川や支流に河童（かっぱ）がすむという。その姿や行動は全国一般的な河童とほぼ同じで、中には、人間に捕らえられ困難な条件をクリアしない限り二度と出てこないと約束させられる河童もいた。岩田の河童ゴライボーシの場合、「この松の木が生えている間は」という条件であった。おかに伝わる伝承では、田中神社ににぎり飯を供えると、河童のゴライボーシが上流にまで登ってこないという。生馬の河童ゴーライは、美しいかんざしに化けて人を水辺へと誘い、水中へと引きずり込むという。

岡にある田中神社に握り飯を供えると、これより上流にまで河童ゴライボーシが登ってこないといわれている。田中神社は、南方熊楠が熱心に保護を訴えた神社でもある。小さいが、特有の自然、雰囲気が残されており、必見だ。

岩田には、空神（くうしん、そらがみ）の話が伝わる。ある日、岩田に住む万蔵は、女房とケンカして家を飛び出した。すると、山伏装束の空神が現れ、万蔵を背負って空へ飛び立った。万蔵は三日後に戻ってくるが、村人がコトの次第を聞くと、家族が心配しているから帰れと言われたこと、兵庫県の西宮の酒席で酒を飲んだこと以外は「空神様に怒られる」と何も話さない。その後、万蔵は空を見上げては「空神様が通られた」と礼拝するようになったが、その姿は誰にも見えなかったという。一方、上富田の南の日置川には天狗と交流した徳松の話が伝わるが、話の内容が似ている。空神は、紀南方面に多い自然信仰の矢倉神社にまつられていることがあり、岩田の空神が山伏装束だったという姿からすると、天狗と神の中間のような存在なのかも知れない。

真っ暗な夜の山道には何かが潜んでいることがある。上富田には、柴を折るような大きな音を鳴らしては人を惑わす柴折（シバオリ）が出るという。狐や狸あるいは物の怪の悪戯であろうとみられるが、その姿を見た者は誰もいない。写真には不思議な球体も写り込んでいる。（イラストはBoBo）

上富田では、夜遅くに山道を歩いていると、どこからともなく「バシッ！」としばを折るような大きな音が聞こえることがあるそうだ。不思議に思って音のする方向に近づくと、音はどんどんと遠ざかっていく。意地になって音を追いかけると、気づかぬうちにとんでもない奥地にまで導かれてしまう。正気に戻った際には、肥だめの中に落ちていたり、体一面にハリネズミのように針が刺さっていたり、衣がボロボロになっていたりするという。古老の話では、それは柴折（シバオリ）の仕業で、狐や狸あるいは物の怪（もののけ）のいたずらであろうとみられるが、その姿を見た者は誰もいない。昔の山道は、夜は真っ暗で整備もされてなかったため、柴折やさまざまな妖怪が隠れすむこともできたのであろう。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。